

必死になったからこそ今がある

みのゝれの名づけ親でもある野手さんは、みのゝれが誕生する2年前(平成12年)から携わっている。みのゝれこけら落とし公演「田んぼの神様」の、団員募集チラシを見て興味をもった。約80名の人が集まった中で、野手さんはプロの先生と、メンバ―の架け橋となるマネージャー役を務めた。「みのゝれで楽しいことも辛いことも経験して、ふと真夜中にポンと「みのゝれ」という言葉が生まれた。名前が浮かんだとき、辛くても頑張れる糧となったんです。「ゝ」の部分は、みのゝれでみんながそれぞれ経験した山あり谷ありの想いを表現しました」と懐かしむ野手さん。ミュージカルのメンバ―は、小さな子どもから大人まで参加。「田んぼの神

仲間・家族の絆 より強いものに

様」の作・演出をした大谷亮介先生が「私は役者一筋で生きてきたから、稽古で住民の人と関わり触れ合えたことで、学校の先生も銀行員もどんな職業だった大変なんだなって感じた。これからの人生180度変わった。みんなありがとう」と最後に言ってくれたという。野手さんにとっても、本当に嬉しい言葉だったという。また、「田んぼの神様を観に来てくれた息子から『お母さんはこんな事をやっていったんだね。すごかったよ!』の言葉に、最後までやり遂げてて良かった」と思った。

野手さんは「みのゝれやMYUを見ていて、思春期の子どもたちが過ごすのにとても良い環境だと思う。みんな生き生きしていて、何かに一生懸命に打ち込め、気の合う仲間がこんなに集う場所なんだから。でもきつと他の人から見ると、みのゝれに来ていたことは、精神的にも余裕がある人が来ていると思われがち。本当は何か救いを求めてきている方も多いはず」と言う。また、「主人や子どもたちや両親の理解や協力がある、恵まれた環境の中にいるのでみのゝれに深く携わることが出来るんだと思う」と家族への感謝を語った。

お芝居を見に行ったり映画のエキストラに参加したりと本当にキラキラと輝いている。野手さんにとってみのゝれは、「若さを保つ秘訣の場所、若い人たちのための愛が実る場所」だ。

最後に野手さんが講演会で聞いた楽しい子育ての秘訣を教えてください。「母親は美味しい物を食べさせて、安心な寝床を作ってあげて、褒めてあげること」と・・・きつとみのゝれもこんな形で、育てていくんですね。

(藤田 佐知子)



「みのゝれにくると、たくさんの人と出会うんです。こういう人のつながりを大切にしたいな」と語る野手さん

みのゝれ住民劇団「演劇ファミリー Myu」
なつかしの名画座企画実行委員・みのんば編集局員

野手利江さん

みのゝれと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ NO. 49